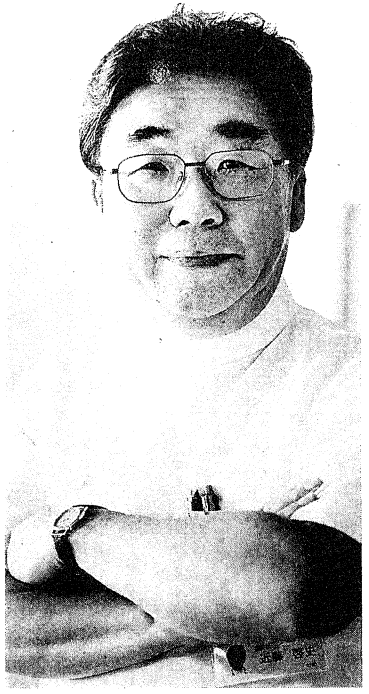
哀惜



腕を組み穏やかにほほ笑む、白衣姿の近藤啓史さん。この写真を家族は遺影に選んだ＝2013年ごろ（家族提供）

近藤（こんどう） 啓史（けいし）さん

国立病院機構北海道がんセンター院長

6月24日死去　63歳

がん死亡率低下 連携図る

突然の訃報だった。前日は札幌で国立病院機構の北海道・東北地区の院長会議に出席。夜、上機嫌で自宅に帰り、床に就いた。翌朝、起きてこないので家族が見に行くと意識がなかった。急性心不全だった。「本人が一番心残りだと思います」と妻の貴子さん(62)は語る。

札幌生まれ。旭医大で学び外科医に。患者の体の負担が少ない肺がんの胸腔鏡（きょうくうきょう）手術の第一人者だった。2013年、道内のがん拠点病院をまとめるがんセンターの院長に就任。道内のがん診療の向上に力を注いだ。

普段は時間があれば院内を回り、職員の話に耳を傾けていた。「啓ちゃん」。よく知る患者やがん経験者は仲間内で親しみを込めこう呼んでいた。高橋将人副院長(53)は「気さくに話ができる親しみやすさの一方で、一度決めたら何が何でもやり遂げる人でした」としのぶ。

近年は北海道の高いがん死亡率を下げるため、患者や医療者、行政、議員、企業関係者らが連携したオール北海道でのがん対策の実現に向けて行動。関係者が一堂に会する「北海道がんサミット」を立ち上げた。ともに取り組んできた長瀬清・北海道医師会長(79)は「彼が始めたことを途中で投げ出せない。皆で覚悟を決めてやる」とひつぎを見送りつぶやいた。

がんセンターでは今春、念願の全面建て替え工事が始まったが、4年後の完成を見ずに旅立った。玄関そばにある新病院の模型の屋上には、沖縄の守り神シーサーが鎮座する。「屋上が寂しいから僕が置いたんだ」と話していた笑顔を思い出す。この守り神のように家族や患者、職員をずっと見守っているに違いない。（生活部　岩本進）